

# Weekly Michael's News

## <今週の聖句>

2018年1月29日発行 No.63

『一行はカファルナウムに着いた。イエスは、安息日に会堂に入って教え始められた。人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。』

(マルコによる福音書 1:21~22)

## <2017年度の昼礼拝が終了!! 協力して下さった皆様へ感謝と共に見えてきた事は…?>

先週の金曜日で2017年度の後期授業が終了し、それに伴いチャペルの昼の礼拝も終了となりました。その後に表れたデータから、今年の昼礼拝の特徴や傾向が見えてきましたので、紙面を借りてご報告させていただきます。今年度、チャペルでは150回の昼礼拝を奉げる事ができました。また総計4,082名(平均では27.2人)もの参加者が与えられました(詳しい内訳は以下の通り)。

4月	419人(礼拝回数15回)	9・10月	632人(礼拝回数27回)
5月	483人( // 18回)	11月	639人( // 21回)
6月	632人( // 22回)	12月	453人( // 16回)
7月	405人( // 20回)	2018年1月	419人( // 11回)

上記の数字は、学生・教職員の皆様のご協力があったの事と思い、深く感謝いたします!! 中にはお忙しいスケジュールの合間を縫うように参加して下さった方がおられました。自分のゼミ学生を誘ったり、授業内等で礼拝出席を促して下さった先生がおられました。聖歌隊などキリスト教センターの活動にご協力下さった方々もおられました。日々の奨励では、キリスト教関連の話だけでなく、ご活躍されている専門分野から身の回りの小さな出来事まで、多種多様なメッセージを出席者と共に分かち合う事ができました。特に今年度顕著であったのが、学生の奨励回数が飛躍的に上昇した事で、11人もの学生が講壇の前に立って力強くメッセージを語ってくれました。このような積極的な流れは、ぜひ次年度に於いても更に発展させていきたいと考えています。本当にありがとうございました。

昼休みに行われている、わずか15分足らずの短い礼拝ですが、そこに神戸国際大学のキリスト教教育の大切な柱が存在している様に感じます。今年、2018年に神戸国際大学は50周年を迎えます。

その大きな節目に、大学に繋がる一人ひとりの学びや活動、そして働きをより充実させるためにもまずこの礼拝に力を注ぎ、全てを司っておられる見えな大きな存在に心からの祈りを奉げる…。

それが集う学生・教職員の交わりを深め、そして何より私たち一人ひとりの魂の質を高め、有意義な歩みを実現させる、つまりは神戸国際大学の建学の精神である「神を畏れ 人を恐れず 人に仕えよ」を具現化させる力となると信じます。どうぞ新しく迎える2018年度もキリスト教センター、またチャペルで行われる昼の礼拝をどうぞよろしく願いいたします!!



学生・教職員が心を一にする所に大切な土台が育まれる

## <先週のメッセージ>

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています。

### 1月22日(月) テーマ:「坂本竜馬よ、さようなら?」 野間 光顕(チャプレン)

昨年末に「歴史教科書の使用用語を大幅削除」という新聞記事を見て驚いた。受験生の負担を軽減し、暗記中心の現状を改善するのは分かるが、記事後半の削除予定の欄には「坂本龍馬」の名が記されており、その理由として「政治の表舞台で活躍したわけではない」という説明に違和感を覚えた。確かに竜馬は、大きな歴史のうねりの中で表舞台より裏方で働きに徹した人物だ。しかし、265年も続いた江戸時代末期、諸外国が日本に押し寄せる激動の時代に、既成権力に捉われず、物事の大きな流れやうねりを見据えながら、自由に活動を起こして人と人を繋いだその生き様に魅了され、勇気づけられた人は少なくないだろう。学生にとっては、裏方の大切さや、大局を見据える目、また真のコミュニケーション能力とは何か?を学ぶ大切な機会となるのではないだろうか。何よりこの改善案には、「なぜ歴史を学ぶのか?」という基本的視点が欠けている。「歴史を学ぶ」とは、細かい用語の暗記ではなく、流れや因果関係を踏まえつつ、最終的には、先人の歩みから叫ばれる教訓、生きる為の知恵やセンスを培う事のように思う。今日の聖書は、クリスマスの裏で起こった悲しい事件を今日に伝えている。ここに聖書の歴史観が表れている。現代社会に生きる私たちも、先人の歩みを謙虚に学び、そこから混乱の時代を生き抜く希望を見出す…そんな歩みを共に進めていきたい。

### 1月23日(火) テーマ:「チャンスを手放すな」

前田 次郎(理事長)

以前、私は建築に詳しい小林敬一郎先生から大変興味深い話を聞いた。それは神社仏閣にしても、教会やキリスト教学校でも建築様式としては共通のものを持っており、それは門から本殿に至る道が直線に作られているという事だ。その道を歩きながら、本殿に相応しい自己反省をしながら歩きなさいというメッセージなのだそうだ。私たちは、人間として今日まで様々な出来事に遭遇しながら生きてきた。今日の聖書にも様々な「時」が記されているが、その「時」から逃れる事はできない。人間は老若男女の区別なく、自分の意思や決断を超えて起こる事象から逃れられず、その中には納得できない事も多くある。目まぐるしい日々の生活の中で、こうしてチャペルに集まるのは、何か自分の生活に影響するものを、この礼拝を通して感じるからではないだろうか。以前、一人の学生がチャペルの活動に繋がる中で更なる学びを求めてきたので、神学部を紹介した事があった。彼は更に研鑽を積み、留学を経て、現在は日本で屈指の学者として活躍している。私たちは、自分の生活の中で他者の「声」や聖書が伝える「時」に耳を傾ける姿勢が必要だ。今日の聖句にある「時」(ギリシャ語で「カイロス」)は、「チャンス」「良い機会」とも訳される。それらを一つでも多く活かして欲しい。

※1月24日(水)・25日(木)は入試のため礼拝はありませんでした。

### 1月26日(金) テーマ:「私たちに脅かす侵略者(インベーダー)」 野間 光顕(チャプレン)

昨今、世界的有名企業による製品データの捏造・改竄が深刻な問題となっている。何故このような不正が起こるのか? それは、発覚した時のリスクや信頼の失墜よりも、とりあえず目先の利益や業績向上を求める、つまり我々が「数字」という侵略者に毒されているからだ。数字は今から4500年以上も前から、我々の生活に利便性と客観的合理性を与えてきた。しかし、現代社会では我々自身が「数字」の持つ力に依存し過ぎていないだろうか? 私はチャペルで行われるこの「昼の礼拝」に、「数字」の魔力に対抗する力が存在しているように思う。わずか15分、参加したからといって別に成績が上がるわけでもないこの小さな活動にKIUほぼ全員の教授、また職員や学生も協力してくれている。これがKIUの多様性を担保し、学内の繋がりを確実に深めている。今日の聖句では、小さなからし種に秘められた大きな可能性が説かれている。侵略者「数の力」に抵抗するには、様々な意見に耳を傾け、静寂の中で自らを省み、心や魂の質を高める生き方が求められる。そんな生き方を選ぶ人が一人でも多く生まれる事を願って、次年度も礼拝の質を高めていきたい。(文責:野間 光顕)